

二〇一六年度A

小論文 (60分)

△注意▽

- 一. 開始のチャイムがなるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 原稿用紙は、2枚配布されます。どちらか1枚を提出しなさい。
- 三. 提出する原稿用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入しなさい。
- 四. 提出する原稿用紙の冒頭にある所定欄に、○印を付けなさい。

【問】次の文章を読んで、筆者の主張をふまえながら、「幸福」ということについて、あなたの考えを六〇〇字で述べなさい。

【時間六〇分】

東京・高尾山で行なわれた「エコロボキャンプ」に、私は参加したことがあります。夜、草の上に寝転がって星空を見上げながら、宇宙について考えました。世界で一番速い「光」でも、宇宙の果てまで行くには一〇〇億年以上かかります。この廣大無辺の宇宙は、人間の知能を超えて広がっていて、その宇宙の中に私たちが暮らす地球があるということに、何か深い感慨を覚えたものです。

地球は四六億年前に誕生しましたが、当初は火の玉でした。その地球に海と大気ができ、生物が生まれたのは四〇億年前。廣大無辺の宇宙の中でも、地球は生命を根付かせてくれた非常に希少な星と言えるでしょう。

その後、さまざまな生物が生まれては滅びることを繰り返しながら、今日に至っています。人類が登場したのは「わずかに四〇〇万年前。地球の長い歴史の中では新参者です。高尾駅からキャンプ場まではバスに揺られて約五キロですが、地球の四六億年の歴史にこの距離をあてはめると、人類が生まれた四〇〇万年前ほどのあたりになるかといえば、私からわずか四メートル先になります。

人類も、当初は自然と一体の生活を送っていたのですが、狩りを覚え農耕を学び、だんだんと文明を発展させていきます。そして二〇〇年前に起きた産業革命が、人類がエネルギーを大量に使った生物のことを想い、原発に支えられたエネルギーを使つて得られた豊かさに、「これでいいのか」と自問自答をすることだと思えます。自然の力を活用する新エネルギーを議論する前に、「たかが電気のために、何をしてもいいのだろうか」と考えることではないでしょうか。

地球にある資源エネルギーには限りがあります。その一方で、人類はエネルギーを使いすぎているのです。

今から一〇〇年前の日本人の平均寿命は、五〇歳未満です。当時は一人一日当たり、食料を含めて数千カロリーしか使えませんでした。人間が生きるためには、一日当たり二〇〇〇キロカロリーの食料を摂る必要がありますが、それ以外にもさまざまなエネルギーを使います。数千カロリーでは満足な食事は叶わず、そのため寿命は短かったのです。

高度成長期以降、日本人は一日当たり四万五千キロカロリーのエネルギーを使えるようになった結果、平均寿命は七〇歳、八〇歳と延びてきました。現在では、一人当たり平均一二万キロカロリーのエネルギーを使っています。

私は以前から、日本人のエネルギー消費を現在の半分、六万キロカロリーにすることを提唱しています。六万キロカロリーは、ほぼ一九七〇年代の消費レベルです。当時、冷蔵庫、テレビ、洗濯機などほとんどの電化製品は揃っていません。しかも今日の省エネ技術は、七〇年代よりはるかに進歩しています。白熱灯ではなく蛍光灯が普及し、さらに省エネ度の高いLED（発光ダイオード）が出現、冷蔵庫も以前の十分の一くらいのエネルギーで動くようになっていきます。

たとえ六万キロカロリーでも、七〇年代よりはるかに豊かな生

う、大転換点となったのです。それは私の唇の先、ほんの〇・二ミリ先のことにすぎません。

ジェームス・ワット（一八〜一九世紀に活躍した英国の発明家、エンジンア）が発明した蒸気力で機械を動かすようになると、それまで奴隷や家畜を使つて行なわれていたさまざまな仕事は、機械が担うようになりました。人類はそれ以後、「エネルギーを使えば使うほど豊かになる」と考えてきたのです。

地球上に人類が誕生してから今日までに消費したエネルギーのうち、約六割は産業革命後の二〇〇年間に使われました。わずかな期間にこれほど膨大なエネルギーを使つて、私たちは今の生活を作り上げたのです。しかしそのために、他の生物が次々と絶滅に追い込まれています。

私が星空を見上げた高尾山には一三〇〇種類以上の植物が生えていて、五〇〇〇種類以上の昆虫などが生きています。地球上には六〇〇〇万種類以上の生物が存在すると考えられています。環境破壊により、毎年五〇万種類くらいが絶滅をしているそうです。私たちは、他の生物のおびただしい犠牲のうえに生きているわけです。

他の生物からすれば、人間という傲慢極まりない生物が地球上にはびこったことが、最大の「惨事」と言えるかもしれません。

原発に反対するとは、この地球に生まれたことに感謝し、犠牲

活が可能です。贅沢さえしなければ、十分に命を維持し、人間的な生活を送れるレベルと言えます。

問題なのは、日本人が六万キロカロリーに減らしても、まだ世界平均の四〜五万キロカロリーを上回っていることです。世界の人口は六六億人（二〇〇六年）ですが、そのうち工業文明国に住んでいる人が四分の一、約一六〜一七億人です。残りの五〇億の人たちは、いまだにエネルギーをほとんど使えない生活を強いられています。特に一二億の人たちは、「絶対的貧困」と国連が定義する状況に置かれています。そのうち五億の人は飢餓に直面、劣悪な衛生・健康状態の中、二〜三秒ごとに一人の子どもが死亡しているのです。

そのような現実を顧みることなく、さらに大量のエネルギーを使つて、贅沢を享受する社会を作ろうとしているのです。この差別的な世界を、一体どうすればいいのでしょうか？

宮沢賢治は、「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と記しました。私は、「世界ぜんたい」とは人間のみを指すのではないと思います。人間を含めたこの世界全体が幸せになることを、賢治さんは願っていたはずですが、また、そう考えなければ、この地球という星を守ることができないところまで、私たちは追い詰められてしまったようです。

追い詰められた場所に、逃げ道も抜け道もありません。私たちは、エネルギー消費を半分にしても大丈夫な文化を築くことに、真正面から取り組む時がきたような気がしてならないのです。

小出裕章『原発はいらない』

（幻冬舎ルネッサンス新書、二〇一一年）より